

日本文学の魅力に迫る

～日本三大随筆を読む 「方丈記・徒然草」編～

方丈記3 最終章

講師：現代歌人集会 理事長 林 和清先生

日時：6月23日（月） 10:00～11:50

■方丈を結ぶ

鴨長明

- ① 下鴨神社正禰宜鋸の子として生まれ将来を嘱望され7歳にして位を得る
- ② 父の急死により将来の望みを絶たれ失意のどん底に。宮司に立候補するも敗れる
- ③ 祖母の家に居候し、妻子も得るが、引きこもりで無職、祖母に見限られ妻子も住居も失う
- ④ 和歌と琵琶で身を立てようと精進、評価を得るようになり、ついに和歌所の奇人となる
- ⑤ 精勤が認められ、後鳥羽院の推挙により、河合社の宮司となる筈が、横やりが入り頓挫する
- ⑥ 後鳥羽院の代替案も辞退し、出家する。



■真の無常とは何か

鴨長明は「方丈記」のラストを、草庵での独居を愛する自分を戒める言葉で締めくくっている。自給自足のおだやかな老境にある長明は、心身ともに満ち足りたみずからの出家者スタイルを、厳しく問いたださずにはいられなかった。おのれの生き方、そして人の世の有り様を妥協せずに真っ直ぐに見つめ続けた長明の姿勢。世俗にとらわれず、澄んだ心を持って、自分が良いと感じるものへ心を寄せること。これを鴨長明は「数奇」と唱えたい。山中での暮らしで、数々のものに心を寄せた鴨長明。まさに数奇。しかしこれでよいのだろうか、と疑問を持つことをやめはしなかった。方丈生活を賛美するかに見えた長明は、最後の最後で突如立ちすくみ考える。「執着を捨てる」ことに「執着」する自分は悟っていないではないかと。そしてその自問に答える術をしらないまま念仏を唱えて「方丈記」は終わる。自分の考えさえも絶対だと決めつけない心のあり方を貫く長明の姿勢こそが究極の「無常」ではないかという考えもある。

